様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００５５８

研究課題名（和文）中世インドにおける帰依思想の民衆化に関する思想史的研究

研究課題名（英文）A study on the popularisation of bhakti theory in medieval India

研究代表者
井田　克征（IDA, Katsuyuki）

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：６０５９５４３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，マハーラーシュトラ州北部において13世紀以降に展開した，マハーヌバーヴ派の帰依思想を取り扱う。この教団は，正統的なヒンドゥー教の教理や規範を否定する一方で，平等主義や独自の救済論を主張して民衆の支持を受けた。
本研究では，この教団の根本聖典『リーラー・チャリトラ』において提起される，神の化身に対する帰依の観念を精査し，さらにこの帰依思想がどのような思想的ルーツを持つのかという問題を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中世マラーティー語の資料としては最古の時代に属する『リーラーチャリトラ』を，文献学的な手続きにもとづいて厳密に分析，解明することは，思想史的に極めて重要な研究と思われる。このテキストが示す帰依思想は，先行するサンスクリット的な帰依思想と，この時期以降に隆盛を極める民衆的な帰依の宗教との間をつなぐものであるから，この研究によってインドの宗教史上きわめて重要な転換を解明することができるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study deals with the bhakti theory of the Mahanubhav sampraday, which developed in northern Maharashtra from the 13th century onwards. This cult often criticised orthodox Hindu doctrines and norms and advocated egalitarianism and its theory of salvation. It thereby gained popularity among the people.
This study examines the concept of devotion to the five avatars of the Supreme God exclaimed in the Lila-Caritra, then further explores the ideological origins of their theory of devotion.

研究分野：インド哲学

キーワード：ヒンドゥー教　バクティ　マハーヌバーヴ派　リーラーチャリトラ　マハーラーシュトラ　インド学　帰依

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

最高神への熱情的な帰依を通じて救済をめざす帰依思想（バクティズム）の思想的系譜は，古代の『バガヴァッド・ギーター』以来，古代タミルの宗教詩などの影響を受けながら，『バーガヴァタ・プラーナ』（10ct.）においてひとつの頂点を迎えたとされている。しかしながら新期インド語の諸資料に目を向けると，その後 13 世紀以降のマラーティー語圏において民衆的な帰依の宗教が姿を現している。それまでサンスクリット語の聖典において展開されてきたヒンドゥー思想の領域においては，バラモンないし上位階層が知識と権威を独占することが是認されてきたのに対して，この新しい帰依の宗教では神の恩寵に対してあらゆる個人は平等であるとされたため，さまざまな階層の人々からの支持を獲得し，現在に至るまでヒンドゥー社会における重要な潮流の一つであり続けている。

このように帰依の宗教の系譜は長い歴史を持っているが，それがなぜ 13 世紀に民衆の中で爆発的に広まり，定着するに至ったのかという点については，いまだ明確な答えは得られていない。帰依思想はそれ以前の時代においてもしばしば民衆を巻き込んだものと想像されるが，北インドの各地域において大規模な教団が形成されるようになったのは，13 世紀後半より後のことである。中世ヒンドゥー教史上の大転換ともいえる大規模な「帰依思想の民衆化」は，どこでどのように起こったのか。

本研究はこのような帰依思想の民衆化という問題を思想史的側面から解明することを目指して，一連の民衆的な帰依の宗教の中でも最も古い時期に成立したとされるマハーヌバーヴ派の根本聖典『リーラーチャリトラ』を取り扱う。13ct.に現在のマハーラーシュトラ州北部で成立したマハーヌバーヴ派は，その後の民衆的な帰依の宗教集団に対して大きな影響を及ぼしたと言われている。

中世マラーティー語の散文で記された約 1,200 章からなる『リーラーチャリトラ』は，この派の祖師チャクラダルの行状記として，彼の生涯を述べているとともに，彼が説いた教えを数多く収録しているためにこの派において最も権威ある聖典とみなされている。このテキストはマラーティー語の資料としても，民衆的な帰依思想の資料としても最古のものであることが確認されており，その重要性は明らかである。にも関わらず現時点でほとんど研究は進んでおらず，問題の多い校訂テキストが辛うじて刊行されているのみという状況である。

２．研究の目的

本研究は『リーラーチャリトラ』に説かれる救済論を分析して，この時期に生じた「帰依思想の民衆化」という現象の，思想史的背景を解明しようとするものである。そのために，以下のような課題に取り組んだ。

まず第一に，新期インド語の最古層に属する『リーラーチャリトラ』のテキスト校訂と翻訳である。現時点で刊行されているいくつかのテキストには，読みに問題があるのではないかと思われる個所が少なくない。ゆえに本研究においては，まず現地において写本を収集し，そうした写本資料にもとづいてテキストの読みを確定する。

第二に，この『リーラーチャリトラ』が，先行するサンスクリット語の諸聖典において展開された，正統的（バラモン的）な思想伝統をどのように引き継いだのかという問題を明らかにする。『リーラーチャリトラ』は，『バーガヴァタプラーナ』が説くクリシュナ神への帰依思想から大きな影響を受けていると思われるが，その一方で不二一元論的な幻影説，主知主義，タントリズムの解脱論，ヨーガの思想などからの影響も想定される。そうした伝統をどのように引き継いで，またそれを改変して自らの帰依思想を体系化したのかを明らかにする。

第三に，『リーラーチャリトラ』の帰依思想が，14 世紀のマハーヌバーヴ派における『スートラパート』『スムリティスタル』などの思想にいかなる影響を与え，民衆的な帰依思想の主流を形成するに至ったかという問題に目を向ける。それはつまり『リーラーチャリトラ』において萌芽した民衆的帰依思想の体系化と発展という視点ともいえるだろう。

３．研究の方法

『リーラーチャリトラ』は全部で 1,200 章を超える長大なテキストであるため，一連の研究にとりかかる前に，現行の刊本の目次やイントロダクションなどを参照しつつ全体の大まかな流れを把握し，その中でチャクラダルによる教説などが多く含まれる重要箇所をいくつか選定した。そして各箇所の分析，翻訳にとりかかった。

本来は研究初年度よりインドのマハーラーシュトラ州において現地調査を実施して，各地の僧院などに保存されている写本資料を収集する予定であった。実際に 2018 年度，2019 年度にはプネーやリッダプルなどにおいて調査を行って，多くの写本資料の所在を確認し，またいくつかの写本資料を入手した。この期間中には，現地の研究者や僧院関係者との間で

情報交換も行った。
　しかしながら 2020 年度以降は，新型コロナウイルスの蔓延によって現地調査の実施は困難となった。そのため写本資料の収集はそれ以上進めることができず，やむなく一連の研究計画を見直さざるを得ないこととなった。つまり校訂版テキストの作成は放棄して，手元の写本資料は，テキストの正しい読みを確定することに役立てるにとどめることとした。その代わりに取り扱うマハーヌバーヴ派関連資料の選択範囲を広げたり，分析する『リーラーチャリトラ』の取り扱い範囲を広げるなどした。
　研究初年度および二年目に関しては『リーラーチャリトラ』の読解，分析作業が中心となった。それと同時に，応募者が過去の研究で取り扱った『スートラ・パート』『スムリティスタル』など，14 世紀に成立したマハーヌバーヴ派聖典群と『リーラーチャリトラ』の教説を比較して，　『リーラーチャリトラ』が得帰依思想が，同派の郷里の中でどのような位置を占めているのかを検討し，さらには教団形成に対する影響などを考察した。
　研究三年目以降は『バーヴァガタ・プラーナ』とその注釈類を参照し，サンスクリット的な帰依思想と『リーラーチャリトラ』の関係を明らかにした。さらに研究三年目以降は，『リーラーチャリトラ』が先行するタントリズムやヨーガ思想，不二一元論などの伝統からどのような影響を受けたのかという問題を検討した。

４．研究成果

第一に，当初目指したような『リーラーチャリトラ』の部分的校訂作業は，上に述べたような事情から実現できなかった。これは，新型コロナウイルスの影響が収まり，現地調査が可能になって以降の課題として残される。
　そして第二に，先行するサンスクリット思想からの影響についてであるが，総括すると以下のようにまとめられる。①出家主義にかかわる諸観念，つまり無所有や禁欲，社会的関係の放棄などといった理念は，ヒンドゥーの法典類からの影響をそのまま引き継いでいる。②化身思想の中核は，『バーガヴァタプラーナ』をはじめとするヴィシュヌ派のプラーナの思想と共通するが，一方でそうしたバクティの対象としては当時のローカルな神々へと移行している。③タントラ的な瞑想やヨーガなどの神秘的実践は，部分的には説かれるけれども究極的には重視されない。特に『リーラーチャリトラ』成立から少し遅れて成立した『スムリティスタル』の中では，化身へのバクティ以外の神秘主義的実践はほとんど描かれない。④これらの点をすべて考え合わせると，『リーラーチャリトラ』の中に見出される，開祖チャクラダル・スワーミンの教説は，出家主義やヨーガ，神秘主義的実践などをかなり含んでいたのに対して，開祖が地上を去ったのちにマハーヌバーヴ派の中で教理が体系化される際には，それが改組を含めた最高神の化身たちへの帰依を中心とするものへと変容したのであろうことが想像できる。
　第三に，『リーラーチャリトラ』がマハーヌバーヴ派の教団形成と発展にどのような影響を及ぼしたかという点に関して，簡単にまとめておく。①教理的には，先述のように『リーラーチャリトラ』が説いた出家者像や，ヨーガ，神秘主義的実践などは，『リーラーチャリトラ』以降に成立した諸聖典の中に見出される教理体系において，中心的な位置を占めていない。これはおそらく，チャクラダルが出家修行者としての立場から救済論を説いていたのに対して，後代の聖典たちはこのチャクラダルの弟子たちが教団を形成し，開祖チャクラダルこそが最高神の化身であると考えたこと，そしてこの化身に対するバクティによる救済を追求したことを理由とする。②『リーラーチャリトラ』や，チャクラダルの師グンダム・ラーウルの行状記『リッダプルチャリトラ』，これら二人のグルたちにアンチ・バラモン的な傾向を持っていることを記述している。これはおそらく古代以来，出家者の価値観がしばしばバラモン的価値観と矛盾することを反映しているかもしれない。これに対して，後の時代のマハーヌバーヴ教団において繰り返されるアンチ・バラモン的な言説は，もはや重視されなくなった出家主義をその起源とするというよりは，村落社会においてカーストや身分を超えた幅広い支持を期待する，この時代のバクティ的教団の生存戦略という側面を持っていただろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井田克征	４．巻 0
２．論文標題 出家の理由―マハーヌバーヴ教団の事例から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 南アジアの新しい波・上―グローバルな社会変動と南アジアのレジリエンス	６．最初と最後の頁 245-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井田克征	４．巻 0
２．論文標題 マハーヌバーヴ派の初期聖典におけるアンチ・バラモン的傾向	５．発行年 2022年
３．雑誌名 RINDASプロシーディングス　2021年度RINDAS総括シンポジウム南アジアの思想と価値の基層的変化	６．最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuyuki Ida	４．巻 4
２．論文標題 The Relationship between Dalits and Gundam Raul in the Mahanubhav Hagiographies	５．発行年 2022年
３．雑誌名 MINDAS Series of Working Papers No. 4, The Caste formation in Maharashtra	６．最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuyuki Ida	４．巻 7
２．論文標題 Emotions Relating to Salvation in the Bhakti Literature of Maharashtra	５．発行年 2022年
３．雑誌名 FINDAS International Conference Series 7: Thinking Emotions in South Asia	６．最初と最後の頁 26-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井田克征
２．発表標題 マハーヌバーヴ派の初期聖典におけるアンチ・バラモン的傾向
３．学会等名 RINDAS総括シンポジウム「南アジアの思想と価値の基層的変化」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Katsuyuki Ida
２．発表標題 Emotions Relating to Salvation in the Bhakti Literature of Maharashtra
３．学会等名 Thinking Emotions in South Asia, ILCAA Joint Research Project “Emotional Moments of Social Changes/Movements in South Asia”,
４．発表年 2022年

１．発表者名 井田克征
２．発表標題 中世マハーラーシュトラの聖者伝における感情と救済
３．学会等名 2020年度　第４回FINDAS研究会「南アジア研究における情動の諸相」
４．発表年 2021年

１．発表者名 井田克征
２．発表標題 石と唾：マラーティー・バクティズムにおけるフェティッシュな儀礼について
３．学会等名 第51回南アジア研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Katsuyuki Ida
２．発表標題 Sannyasis and the Village Community According to the Early Mahanubhav Scriptures
３．学会等名 日本南アジア学会第31回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 井田克征
２．発表標題 神々は聖地をめぐる
３．学会等名 2018年度マハーラーシュトラ研究会例会・共催2018年度RINDAS第4回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 井田克征
２．発表標題 出家の理由：マハーラーシュトラのバクティ教団の今と昔
３．学会等名 2018年度MINDAS合同研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 松尾瑞穂、杉本良男、井田克征ほか9名	４．発行年 2019年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 350
３．書名 聖地のポリティクス―ユーラシア地域大国の比較から	

１．著者名 藤井 正人、手嶋 英貴、井田克征ほか14名	４．発行年 2023年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 476
３．書名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関